

5 畜 産

項 目	作 業 内 容
(1) 畜舎火災の予防	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○畜舎火災の予防 ○水道管の凍結防止 ○消毒薬の凍結防止 <p>寒さが厳しくなるこの時期になると、日常的に畜舎で暖房・保温器具を使用するため、火災事故発生の危険性も高まる。消防庁の統計によると、年間 100 件以上（令和元年度）の畜舎火災が発生し、その半数は全焼に至っている。畜舎の構造上、火災が発生すると、家畜・畜舎に甚大な被害をもたらすことになる。</p> <p>主な出火原因は、電灯電話等の配線、たき火、電気機器、電気装置、こんろ、溶接機等作業機械、ストーブの順となっている。このため、火災から家畜や畜舎を守るため、使用機器を適切に取り扱うとともに、機器設備の点検も行い、異常があれば直ちに修繕や部品交換等を行う。</p> <p>ア 暖房器具等の取り扱い</p> <p>暖房器具等の周囲には、乾草や飼料袋、木材等の燃えやすいものを置かないことを心がけ、特に石油ストーブを使用する場合は、火をつけたままの給油や移動は行わないよう注意する。家畜に保温器具を用いる場合は、家畜や敷料等に触れないよう十分な高さを保ち、しっかりと取り付ける。また、寒さに弱い哺乳子牛には、暖房器具の代わりに市販の子牛用防寒ジャケットを着用する方法もある（写真 1）。</p> <p>イ 電気設備の漏電点検</p> <p>絶縁部品の損傷やホコリの付着は、漏電による火災や感電の原因になるので、下記の項目を定期的に点検する。</p> <p>(ア) 畜舎内のコンセントやスイッチ類のホコリの有無を確認</p>

表 1 畜舎における火災の焼損程度

焼損程度	畜舎（件）	割合
全焼	58	50%
半焼	12	10%
部分焼	28	24%
ぼや	14	12%
その他	4	3%
合計	116	—

(火災統計：総務省消防庁)

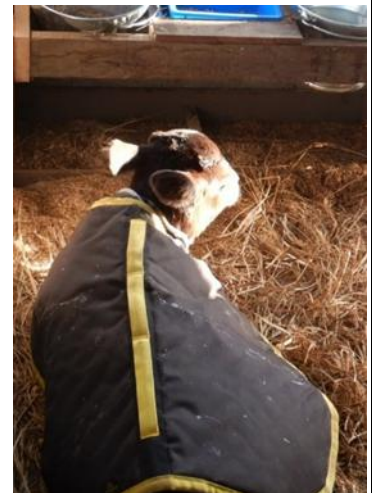


写真 1 寒冷に対する抵抗力が弱い子牛のための防寒ジャケット

項 目	作 業 内 容
(2) 水道管の凍結防止	<p>するとともに、ホコリがたまらないよう日頃から清掃と周囲の整理整頓を心がける（写真2）。</p> <p>(イ) 電気設備やコンセント周りに、雨や結露等による水滴の付着や濡れた跡がないかを確認し、必要に応じて屋根の補修や畜舎内に湿気がこもらないように適切な換気に努める。</p> <p>(ウ) 電気配線が扉や資機材に挟まれたり、ネズミ等にかじられたりして露出していないかを確認し、不具合があれば専門業者に修繕を依頼する。また、配線ボックス内にネズミ等が侵入しないよう配線用の穴をしっかりと塞ぐ（写真3）。</p> <p>(エ) 電気保安協会等の点検を受け、漏電の有無を確認することも対策の一つである。</p> <p>ウ 電気設備の過熱の点検</p> <p>タコ足配線による電気の使用容量の超過、コンセント・スイッチ類の接触不良による電気抵抗の高まりも過熱の原因となる。プラグの劣化等も同様である。このため、器具を適正に使用するとともに、必要に応じて電気容量の変更やコンセントの増設を検討する。</p> <p>エ 消火設備等の設置</p> <p>日々の点検と十分な予防策を講じても、絶対に火災が発生しないとは限らない。もしもに備えて、消火器具等を設置し、火災発生時に迅速な消火が行えるようにしておく。</p> <p>厳寒期となる1月は、夜間や早朝に水道管の凍結が起こりやすく、凍結により水道管が破損した場合、家畜、家さんが飲水できなくなり、その結果、飼料摂取量も減少し、発育や生産性の低下を招くことになる。このため、畜舎の外側や日陰、風当</p>

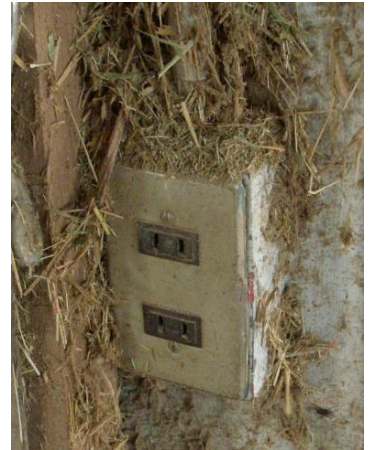


写真2 コンセント等の周囲はホコリがたまらないように掃除する

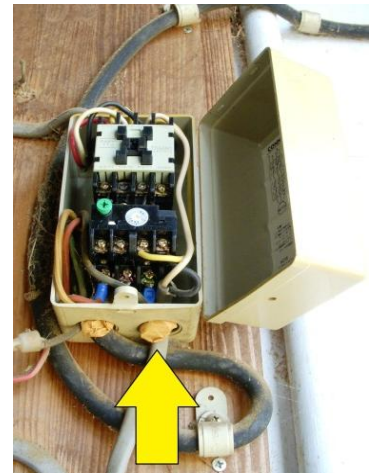


写真3 ネズミやゴキブリが入らないように電磁開閉器等の穴を塞ぐ

項 目	作 業 内 容
<p>(3) 消毒薬の凍結防止</p>	<p>たりの強い場所の水道管には、保温材等を被覆する等の凍結防止対策を行う。</p> <p>病原体侵入防止のため、畜舎ごとに専用の長靴及び踏込消毒槽を使用する。本県でも山間部を中心に畜舎屋外に置いた踏込消毒槽の消毒液が凍結する場合がある。屋外に消毒槽を置く場合には、消毒液に凍結防止剤を添加すると凍らずに消毒効果を維持できる。愛媛県では、-10℃を目安に希釈濃度を設定する。</p> <p>雨や雪が入らないように踏込消毒槽は屋根の下に設置するのが望ましいが、中蓋付の踏込消毒槽を使用すると屋根がない場所に設置しても凍りにくく、雨等による消毒液の希釈や劣化を低減することができる（写真4）。</p> <p>なお、踏込消毒槽に有機物が混入すると殺菌効果が低下するので、長靴は必ず水洗いしてから踏込消毒槽で消毒する。（写真5）。</p> <div data-bbox="480 999 820 1205" data-label="Image"> </div> <p>写真4 踏み込むと沈む中蓋付踏込消毒槽</p> <div data-bbox="842 999 1382 1205" data-label="Image"> </div> <p>写真5 長靴の汚れを落としてから消毒槽に入る</p>

（作成 畜産研究センター）